

## 二条後の物語の方法

福井貞助

### (一)

二条后高子の事は伊勢物語の中に見え、この物語の主要な人物と考えられている。たしかに二条后なる人名の出る章段は勢語中いくつかあり、又二条后という名をあげなくとも、后を思わせる表現をしたものもある。二条后と示す3、5、6、76、95段、東宮女御という29段、更に五条わたりなりける女、という26段、又東の五条の太后宮の西対に住む人という4段に加えて、おほやけおぼして使う給ふ女という65段は、在原なりける男と「大御息所とていますがりけるいとこなる」女との恋を語った長章段の物語で、末尾の「水の尾の御時なるべし。大御息所も染殿の後也。五条の後とも」の注めいた文章によらずとも、右諸段に照して明らかである如く、やはり二条后を暗に示している。総体として二条后と昔ありける男との悲恋を主題とし、もしくはそれを背景としており、3、4、5、6段の一連の、古今集を参照して業平のそれらしき事情の歌を中心に構成されたと思われる章段を含む、ひたむきな恋と悲泣の一群が更に65段で大きく虚構化され、昔ありける男を在原氏と顕わし、他に76段に回想的な趣をもった配置を見せ、26、29、25段と共に二条後の名を出し又はそれらしく構えつゝ、やゝ派生的に后およびその周辺の人との歌物語に及んでいると見られる。しかし勢語の諸本文によれば右の諸段にも小異があり、欠脱となっているものもある。又、3、4、5

6、65段などには、いわゆる後人の注記といわれる、二条后云々の、實在人を頭わす様な文章が附され、これが果して本文と區別して考うべきか、という問題があり、伝本によれば二条后ではなく五条后などもあるものもあり、又広本系では100段後涼殿のはざまの段にも二条后の事という文章が附されていて、かなり動きが感ぜられる。思うにこれらは注釈的な附加の形ではあるが、もともとそんなに新しいものという証拠もない。中には比較的新しく附されたものもあるが、それらは文章のちがひも合わせて、勢語における二条后段の造成固定を考えさせるものである。

二条后は藤原長良の女、国経基経の妹、仁明皇后五条后順子の姪、文徳女御染殿后明子の従姉妹に当る。承和九年誕生、在原業平より一七才年下である。その生涯は大略四期に分けるのが便利である。第一期は二四才まで、入内以前。第二期は二五〜三九才、清和天皇女御中宮時代で、二八才より七年間は貞明親王出生につれ東宮女御と称された時代である。年齢境遇共に華やかな時期と推察される。第三期は四〇〜五四才で清和崩後皇太后位にあり、皇子は帝位につく等地位に重みを加えて行つたが、寛平御記によれば東光寺の僧善祐との関係も生じていたらしい。<sup>(1)</sup>そして第四期五五〜六九才という晩年は善祐との事あらわれ后位を停められ、失意の時期でもあった。后が在原業平と交渉があったとすれば、業平の歿年に合わせ第二期女御中宮時代までである。そして若やかな恋ということになれば、当然第一期に限定される。

略年譜

承和九年	842	一才	誕生
貞観元年	859	一八才	叙従五位下十一月廿日。五節舞姫による（三代実録）
貞観八年	866	二五才	十二月廿七日清和女御時に清和帝十七才（同）
貞観九年	867	二六才	正月八日正五位下（同）

十年 868 二七才 十二月十六日皇子貞明親王誕生（同）  
 十一年 869 二八才 正月八日 叙從四位下（同）

二月一日貞明立太子（同）

十三年 871 三〇才 九月二十八日順子薨（同）

十八年 876 三五才 十一月廿九日、清和天皇春宮貞明―陽成天皇―に讓位。（同）

元慶元年 877 三六才 中宮（同）

元慶三年 879 三八才 五月八日清和御落飾（同）

四年 880 三九才 十二月四日清和崩御（同）

六年 882 四一才 正月七日皇太后（大鏡裏書）

三月皇太后四十賀於清涼殿（三代実録）

寛平八年 896 五五才 九月廿二日后位を廃せらる。東光寺善祐との事による。善祐法師伊豆に配流。（日本紀略）

延喜十年 910 六九才 三月廿四日崩

天慶六年 943 五月廿七日追復本位（一代要記）

こう見たところ後の生涯は十分宮廷人士の噂の種となって流伝しうる。女御時代その周辺は古今集詞書などによれば文雅の人の出入あったらしく、後の生活は清和天皇と共に、血縁の権力者良房基経に支援されて、きらびやかな燭光に浮び上っていた筈である。善祐との事は当初密かにささやかれる程度であつたろうが、后位停止と善祐左遷と大形になるに至っては、宮廷人士にとって好個の話題であつたろう。後の拾遺集にはその折善祐の母のよんだ「なく涙よはみな海となりなむおなじ渚に流れよるべく」の歌が収載されているが、これなども直ちに人中に流布したのか

もしれぬ。後撰集には、宇多天皇の寵をうけた名歌人伊勢御が「善祐法師伊豆の国に流され侍りける時」よんだ歌が載せられている。その「別れてはいつあひみむと思ふらむかぎりある世の命ともなし」の詠は、あるいは善祐母の悲歌を耳にしての作かもしれぬ。

宮廷の噂といえは、後の従姉妹、清和生母染殿后明子については著名であった。三善清行の善家秘記によると、元慶二年高子三十七才の年、染殿后は自らの知命の賀の折、「時太后悦忽。无有入心。而鬼在太后之傍。宛如夫婦之好。杯觴飯宴之間。與太后戲相嬾。」という有様であったという。これをはじめとして後代の説話集に、染殿后に鬼がとりついた話はよく出て来るのであるが、異状を呈した行状が鬼という幻影を生じ、又は解釈され、人口に上ったものと見える。又高子所生の貞明親王は、陽成天皇となったが、禁中極秘といった事件の生じた後、在位八年にして元慶八年讓位となった。<sup>(2)</sup>この様に元慶から寛平へかけての頃宮廷では、あまり公然としたいが人々の口を掩えない事件が色々あった様に伝えられている。これら一系の方々にまつわる出来事は、相次ぐ靈鬼の仕業と見做されもしよう。奇事異聞は筆端にも上ろうが、高子の場合、事は情事に属し、和歌に随伴した説話以外には作為されなかったようである。二条后を伝えるものは伊勢物語を尤とし、大和物語が相添うている。そして而も在五中将業平にまつわりついで生きのびているといえるのである。

## (二)

古今集の二条后に係する歌や詞書はいくつかあるが、三種に分けて考えよう。第一は二条后の歌、第二は伊勢物語をも参看して、二条后の事をはめかしているらしく思われる業平の歌と詞書、第三は「二条后云々」と明示される詞書と歌である。第一種について見ると、二条后の歌はたゞ一首、春上にある「雪のうちに春は来にけり鶯の凍れ

る涙いまや解くらむ」だけである。この歌は詞書に「二条の後の春のはじめの御歌」とあり、元永本などでは「はるのはじめに二条后宮御歌」とやゝ異なる点がある。この歌に関し既に二条后后位褫奪事件後の新年の心懐と見る説が金子元臣氏により出され、近年犬養廉氏は更に諸点を考案して、事件直後ならずともこの歌の成立の契機は後の失意の心裏にありと論じ、詞書も又後年復位後恐らく老齡の貫之の手により加えられたものとのべられた<sup>(3)</sup>。詞書といえれば他に出る四個所の二条后云々の記事における二条后という名も、犬養氏によれば右と同じ添加として矛盾ならしめている。右一首詠作の心中はこの様な解釈では興深いが、正鵠をえているとすれば、二条後の歌は涙をもつてはじまっているのである。又後代後の詠作を失意の日に結合させようという衝動をおこさしめる様な撰採が、既に古今集でなされているのである。一方古今集では後述の如く「二条後の春宮の御息所と聞えける時」などの詞書で、後の周辺に康秀、敏行らおよび業平といった歌人蟬集の片影を伝える作をとり上げている。これら詞書が、「雪のうちに」の歌の詞書と同じく、後年復位後の添加とすれば、一貫した后への追懷がかなり強く働いた様に考えられるが、復位後の添加を仮に考えても、それが原姿では二条前皇太后などとなっていたものかもしれず、簡単には決定出来ない。しかし仮定される加筆がこの様な軽微な字句に止ったにしろ、既成古今の中から后像を復元した理解と再構成が加筆者及び読者に生じたという事は言えると思う。

さて次に前記第二種の歌、詞書について見る事としよう。まず巻十五の冒頭「月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして」の歌は、

五条の後の宮の西の対に住みける人に、本意にはあらでもの言ひわたりけるを、正月の十日あまりになむ、他へかくれにける。ありどころはききけれど、えものも言はで、またの年の春、梅の花盛りに月のおもしろかりける夜、去年をこひて、彼の西の対に行きて、月の傾くまであばらなる板敷に臥りて詠める。 在原業平朝臣

との詞書がある。五条后宮とは仁明后順子である。その西対に住む人とは何人かは明示されぬ。しかし伊勢物語第4段は、右詞書と近似した文章をもって「月やあらぬ」の歌を中心に構成した歌物語であり、3、5、6という、二条后の事との注記ある一連に合わせて、これらの段と同じく二条后物語と解釈されることから、この古今の西対に住む人も又二条后と理解されるのである。しかし表面的にはあくまでこの詞書では誰それとはっきり示しては居らぬ。さりげない書き方ではある。又巻十三「人しれぬ我が通路の関守はよひよひごとにうちもねななむ」の歌も、勢語5段に相当する類似の詞書である、

東の五条わたりに、人を知り置きて、まかり通ひけり。忍びなる処なりければ、門よりしもえ入らで、垣の崩れより通ひけるを、度重なりければ主聞きつけて、かの道に夜毎に人をふせてまもらすれば、行きけれどえあはでのみかへり来て、よみてやりける、業平朝臣

も、「人」とは右と関連して二条后と解釈されようが、表面的にはあくまで何人か五条わたりの人である。しかし五条后といい五条といい、これだけの指示があり、とげえぬ恋という主題の、名高い業平の秀作絶唱であれば、受け取る側の人は無理に誰しれぬ女の人として放置する筈はないのである。必ずや実在人、業平の周辺の噂高い人に結びつけるのが自然である。もしそれしも防禦するとしたらこの様な詞書ははじめからつけない方がよい。つけざるをえぬほど既にこれらの歌には、よまれた場所と共に高名になっていたのであり、歌と切断できぬ物語が成立していたといえると思う。たゞ伊勢物語が既に古今以前に成立していた、という事は断言できず業平集の様なものがあつて、そこにこういう種類の詞があつたものか、別のものがあつたのかわからないが、単に文献上の問題ではなくて、少くとも文人たちの間に生動していた歌や話としては存在したといえると思う。

次に第三種に相当する歌は古今二九三、四四五及び業平の歌八七一である。二九三、四四五歌の詞書はそれぞれ、

(293)

二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉流れたる形をかけりけるを題にて詠める、

素性

(444)

二条の後、春宮の御息所と申しける時に、馬道に削り花させりけるを詠ませ給ひける、

文屋康秀

とあって后周辺にこれら歌人の近づいた事を物語っている。前者は素性の歌について、二九四歌として業平の署名の下に「千早ぶる神代も聞かず龍田川から紅に水くゝるとは」の歌がつゞく。この歌は勢語<sup>106</sup>段では、

「昔、男、親王たちの逍遙し給ふ所にまうでて龍田河のほとりにて」とあり、二条后とは関係なく語り進められている。次に卷十一の業平の歌「大原や小塩の山もけふこそは神代のこともおもひづらめ」の詞書は、

(871) 二条後の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野にまうで給ひける日よめる、とある。これは勢語76段に、定家本では、

昔、二条の後のまだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに御車よりたまはりてよみて奉りける、

とあって、右詞書をそのまゝ、少し長く伸ばした様な文章で傍線部は全く同文である。しかしこの後の歌の次に、

とて、心にもかなしと思ひけん、いかが思ひけん、しらずかし。

と附加文があつて、これによって歌の意味をおちつけている。つまり古今では単に儀礼的な歌であるといえばそれまで、又その様に解するのがこの場合適當であるが、勢語では、底に二条后との往年の情事の思出を匂わせている歌と見なくてはならぬ。しかし両者に共通する、「二条の後のまだ春宮の御息所と申しける時」なる詞章には注意される。——一応本文を検すると、古今二九三、四四四歌の詞書はいずれも「二条後の東宮の：」「二条后、東宮の：」とあつて「まだ」の語がないが、元永本、筋切では四四四歌に「まだ」の語が加わり、勢語76段でも塗籠本は「まだ」

を欠く、という小異があるが、右詞章に關しまずは兩者共通といつてよいであらう——つまり古今には二条后はいずれも「春宮の御息所と申しける時」といった、華かな時期を思わせるものと、失意と見る見解に従えば「鶯のこほれる涙」の心境とが打ち出されているわけであり、おぼろげに后への恋を伝える業平の歌が別に存して、それらにまつわりつきうる様になっている。したがってはっきり二条后の名を出した業平の回想的な「大原や」の歌の詞書中の「まだ」の語は、これを欠く他の二条后云々の詞書ともちがった、意味深長な味をもって浮び上る様に思われるのであり勢語76段は、こうした古今の歌から引き出されたとも、或いは、その原形のようなものが古今に作用を及ぼしたとも考えられるのである。ところで76段は小段ながら相異なる本文が夥しい。最も定家本に異なるのは塗籠本で、

昔二条のきさきの春宮の御息所と申けるころうち神にまうて給けるにつかふまつりける近衛つかさなりけるをきな人／＼のろくたまはりけるついでに御車よりたまはりてよみてたてまつる

おゝはらやをしほのまつもけふこそは神よのこともおもひいつらめ

という本文である。つまり大きな特色は、歌の後の文がない。これがないところから、又塗籠本全体の特異な性格のみから、これこそ原形であるとの早断も禁物であり一考を要する。一体この段の塗籠本の本文は広本系に近いもので大島氏伝為氏筆本では、

昔二条のきさきのまた春宮のみやすところと申けるころ氏神にまうて給けるにつかひまつりける近衛司にさふらひける翁人／＼のろくたまはるついでに御車からたまはりてよみてたてまつりける

大原や……

とて心にもかなしと思ひけんしらすかし

という本文である。末文はあるが簡略である。又別に一二五段の本の中では、最福寺本では特に変り、



昔おとこ二てうのきさきのみやすん所と申しける時……

とこの個所では最も簡略であり、末文は、

心にもあはれと思ひけむしらすいか思ひけんしらすかし

と異り、この点時頼本も、

トテ心ニモアハレトヤオモヒケムイカカ思ヒケムシラスカシ

となっている。疎雑な書写や誤脱によるものもあると思うが、これらを綜考すると、いわゆる末文はどうも動きが甚だしい。そしてないもの簡略なものもあるから、他章段の例よりして注釈的なものであろう。附加文的要素が強いといえる。大島氏本、塗籠本の「つかふまつりける近衛司にさふらひける（なりける）」という個所にしても定家本より繁雑で、95段の「昔二条の后につかうまつるおとこ有けり……」などと合わせて、附加または変改らしいふしもある。附加の文を想定しても、それは要するに解釈の定着の問題ではなからうか。そして各系の本によってとられた構成と解釈の差異ではなからうか。というのは、定家本の様な本文では明らかに3—6段の二条后への思慕の一連、及び65段と照応させてある。しかるに塗籠本では3—6段中二条后の事という注記は6段のみで3段は五条后となっており、これに合わせて4・5段には注記がなく、五条わたり、つまり五条后の事の様に考えているらしい。この点広本系も同様である。65段にしても「おほみやすところはむめのきさきなり」として誤写もあるが、定家本に見られる、「おほみやすん所もそめとのゝ后也五条の后とも」というのよりは、やゝ二条后との恋物語を匂わす点は稀薄である。一体この塗籠本は他に114段が、他本「仁和のみかど」とあるところを「ふかくさの御門」と書いたり、101段や77段という実在人や史実をふまえた段を欠いたりしているかわり、59段と125段を合わせたり、東国下り段に増補の形を見せたり、鬼一口の6段に類似段をつづけたりして、物語の詞や類似を追った編集ぶり、業平周辺の事実や伝承を下敷

にしよとした構成に乏しいのである。物語の統一性はこの本にはこの本なりの試みがある。76段にしても要するに伊勢斎宮段に連続せしめ、神に関わる物語として集めようとしている。だから末文を有しないのも当然である。

### (三)

76段に近似する章段で注意すべきは29段である。定家本で示せば、

昔、春宮の女御の御方の花の賀にめしあづけられたりけるに、

花にあかぬなげきはいつもせしかどもけふのこよひにける時はなし

とある。春宮女御が誰をさすかは一応ぼかしてあるが、それとなく知れるので塗籠本では、

二条後の春宮のみやすところとまうしける時御方のはなのゑんにめしあけられたりける肥後すけなりける人

花にあかぬなげきはいつもせしかともあふのこよひにしくものはなき　とよみてたてまつれり

とはっきりしていて文章がかなり異なる。この冒頭を見ても76段の塗籠本本文の冒頭が他本とやゝ異なるのも単なる誤写ではないと知れるし、又定家本冒頭と合わせ見ても、76段の定家本がむしろ古今集詞書そのまゝの影響を止めている如き様相をはっきりと知る事ができる。この段は76段と同巧である。しかし76段に似た往事追慕の注記も、二条后が春宮女御であった時ということわり書もないのは、76段が業平の歌や史実をふまえているのに対し、この段は誰しれぬ人の歌によって構えた故に他ならぬ。そして76段と同じ趣のこの段は76段に触発されて生じたものというべく、それは一そう仮空的な構成筆致をとっている事によってわかるのであり、他の章段における類似な諸例、つまり60段と62段、6段とB段などによって推す事が出来る性質のものである。29段は76段の如き回想追慕をはのめかす歌ではない。現在のとげられぬ思いを歎じた作である。それ故に段序における位置としては、様々の恋のなげきの、しかも

諸小段集積の一群に投入せられたのである。塗籠本ではかなり様子が異なる。これは76段をそのまゝ踏襲した恰好である。「肥後すけなりける人」とは「近衛府にさぶらひける翁」と区別して変化あらしめる方法にちがいない。前述の如くこの本では人名は史実にあまり拘泥しない。業平が肥後介であったろうがなかったろうが、一向お構いなしである。肥後とは本来備後のつもりであったのかもしれない。なお参考伊勢物語所引の為家本を見ると、この部分「めしあつへられたりけるにひこのすけなりける人」と塗籠本と似た本文をもっている。かといって為家本は冒頭部は塗籠本と同じというわけではなく定家本に近く、又末尾も塗籠本と異なる。塗籠本の末尾「とよみてたてまつれり」とは単なる述懐でなく、心事を歌に托して二条后に知らしめるのであり、この一文もまた76段に近い作用をする。そして冒頭「二条後の春宮の……」は「昔」の語を用いず詞書的である。一体、この段の原姿は定家本の形が古いものか、塗籠本の形がもとかという疑問が生ずるであろう。現に真名本でも、

昔二条後宮廼東宮之御息所與申計流時花賀爾食被上有計流爾近衛司有計流人

とやゝ異り歌の後の詞も有せぬが、塗籠本系の文章である。そして又参考本所引の相本では「むかし二条のきさきの春宮の御息所と申けるとき」とあり以下定家本と同じである。実に問題は「二条後の東宮の御息所と申しける時」という、古今の詞書に多く見え、かつ勢語にも二段にわたって出現するこの詞と、対応するよみ人の表現にしばらくある。

29段が何故諸本ともこの様な位置、つまり「などてかくあふこかたみにけん水もらさしとむすひしものを」「あふことは玉の緒はかり思ほえてつらき心のなかく見ゆらん」の、それ／＼の歌を中心に構成される27、39両段の中間に位置するかというと、「花にあかぬ」の歌がこれらと同様なあい難き恋のなげきの歌だからである。殊に塗籠本で他本「けふのこよひ」とあるのが「あふのこよひに」となっているのは、あるいはいさゝかそれを匂わせるもの

かもしれない。塗籠本を見ると、29段の詞はいきなり「二条后宮……」とはじまり、通例の「昔」なる語を有しない。この様な冒頭の段は塗籠本の章段としてはたゞ一つのものである。「昔」の冒頭を有しない段といえ、定家本では17段、他に広本系でA段、皇太后宮越後本でD段があるのみである。A、D両段はこれを有する本が限られているところを見て、惣じて「昔」の語を有しない章段は追補の疑い濃厚なりと考えてよいと思う。追補はまず歌、次に詞を加えて物語的構成という順序に向うのがごく自然であるからである。26段は塗籠本では章段としての成立が熟していない。とすれば「花にあかぬ」の歌は本来注記挿入されたもので、これが定家本のような本文をとるものと、塗籠本のような本文をとるものと出て来たのではないか。注記的なものだけに詞の主意は同じでも、文章のかなり相違したものが成立したことになる。こういう推定を固めさせるものとして、真名本の段序をあげる事が出来る。真名本はその成立は南北朝頃と考えるのが至当であるが、そのもとになった仮名本は勿論南北朝以前の伝流の歴史をもつものである。真名本では26段の次にB段を位置させている。真名本はこれを除く他、少くとも11段までは定家本と変らぬ章段の配列をもつ。B段を有するのは広本系諸本及び塗籠本であるが、前者では大島氏伝為氏筆本で皇太后宮越後本小式部内侍本の断片の一として記載され、阿波文庫本、泉州本等ではほとんど末尾部に位置するが、塗籠本では6段の次に位置している。B段はその内容からみて6段に類似のもの故に、塗籠本では他にも例がある様に割合に類似段をまとめて連結する傾向があるから、こういう位置はいかにも塗籠本らしい。広本系における様態はB段が他本との接触により、末尾に本文化して行く跡を示している。それならばこの様な浮游的B段が真名本では何故29段の次に位置するのか。思うに29段の周辺部は注記補入の加えやすい箇所である。29段自体、後よりの挿入であり、又B段も同様な経過をこの位置にたどったものではないだろうか。それでなければ内容的に見てもB段が29段の次に位置する理由はない。広本系諸本、塗籠本のB段の位置が何らか納得出来るのに対し、真名本では右の様に考える以外にその位置の

説明は出来ぬ。偶然というにはあまりにも説明しうる条件が揃っている。

29 段の異文とは、大きくいって、㊶二条后について、㊷歌よむある人について、それぞれの表現が異るといえる。大別して一は詳しいもの、他は簡略なものとなる。詳しいものは76 段の詞に近づき、「近衛司有計流人」という真名本が最も近いといえるが、伊勢物語を昔ありける男の一代記と見れば、一方晩年に相当する76 段に諸本とも「近衛府にありける翁」とあり、他方、二条后が東宮の御息所という、男の若い時期に当る29 段で同様に、「近衛司有計流人」というのも変である。塗籠本のような「ひこのすけ」という別な官職であらわすものが生ずるわけである。これらに対し定家本などの様な「春宮女御云々」とぼかした本文はそういった穿鑿からは一応無難でもあろう。一方古今には先に示した二九四龍田河の歌の様に、二条后の許での歌宴に業平が詠作するものがあるが、恋の歌にはなりがたく、勢語では別の内容の章段を形成している。もし古今のまゝに二条后段とすれば76 段と矛盾する点も多いであろう。そこで29 段はその二条后歌宴を伝えつゝも、恋の歌の如く句寄せた一段をなした変容を試みて見られぬこともない。29 段の、大きく二つに對立する本文の差異は、その先後等について複雑な事情もあろうから、軽々しく断定し難いが、要するにこれ又既存の章段に依拠して、新たな一段が加えられる場合の章段形成方法乃至は伝流間の解釈補訂の差異があらわれたものと見る事は出来ると思う。

勢語76 29 段は、古今集の二条后に関する歌の第三種と考え合わせれば、3 4 5 6 段等を第二種に對比した場合にも見られたように、業平二条后物語という悲恋物語にしぼられて表出されんとしており、虚構味の濃くなっている様を見る事が出来る。そして古今春上の二条后の歌の背後に、かつて華かなりし後の涙の生活がこめられているとすれば、勢語ではそのような後の生涯のつたえことを、業平と目される男の悲哀の側から、艶麗な佳什をもっておしつゝみ、勢語の支柱の一としている姿をうかがう事が出来る。

## (四)

次に26段をとりあげる。この段は定家本で示せば、

昔、男、五条わたりなりける女をえゝずなりにけることゝわびたりける人の返ごとに、

おもほえず袖にみなとのさはぐ哉もろこし舟のよりしばかりに

となっているが、詞章は広本系諸本ではやゝ異り、

昔五条わたりなりける女をええすなりにけることゝわらひける人の返事に

となっている。又塗籠本ではこの段を欠く。「五条わたりなりける女」とは二条后であろうということは、4段周辺からすぐ思いうかぶ。勢語を続けて読めば、その様な連想をおし殺す事も無理と思われる。この一段は全く歌と簡単な詞書というべきものから成り、物語的要素は稀薄である。そして詞章も歌も共に難解である。しかも解釈に重要なポイントに異文がある。おまけにこの段全部がない本もある。勢語中でもかなり問題のある一段といべきであろう。この26段について最も詳細な考察を下したのは秋本吉郎氏である。<sup>(4)</sup>まず、氏の説の大要を示したい。氏はその理解の帰結を口語訳で、

「昔、五条辺の女を得ることが出来なくなったと佯び難いてよこした人への返事に、ある男のよんだ歌

思ひがけずも貴方の失恋に涙が袖に落ちさわぐことです。唐舟が来航したと同じやうな予想もしなかった他の男が女に言ひ寄って来たので――」

と示す。そしてこの歌は友情にもとづく歌で、恋愛事情、失恋理由を歌詞に表出しているものと解する故、なお「恋歌」の埒内にあるという。この歌を、唐舟―大舟の押しよせる時おこる波の様にひどく袖がぬれる、という風に解する

通説に対して、恋敵の出現との解釈は折口信夫説の導入がある。しかし折口氏は「他の男が現れた為に自分は思ひがけない泣きを見た」と釈き、歌の作者自身の失恋をみずから詠じた歌と見るが、この点秋本氏は詞章の解釈を右口語訳の如く、作歌者と失恋者とは別人と解し、知頭抄以外の諸注の通説に対抗する。その意図するところは「勢語読解の偏向」をつくに在る。氏の言う偏向とは伊勢物語に語られる事件を実在者業平の経歴に関連するものとして読解しようとする事、である様であり、26段の女を二条后に当てて解する偏向は室町時代からだとする。そしてこの段を業平二条后物語とする偏向が、この段の正しい解釈をゆがませて来たのだ、と見るのである。氏は知頭抄を引く。知頭抄では26段の女を五条后と解し、二条后としていない。又勢語の歌の勅撰入集状況を見て、古今後撰時代は勢語を業平の歌の物語としきってはしまわない、新古今新勅撰時代は、勢語の歌を業平の歌と解しようとする態度が濃いが昔男をすべて業平とするに至らぬ、そして続後撰時代以降は昔男即業平とする読解態度に徹したという。要するに勢語の事件を業平の経歴に関連するものとして読解しようとする事は、はじめ一少部分についてであり、漸次それが他段にも推し及ぼされた、というのである。この見解は注目すべき点が多いが、それだけに問題も少なくないようである。以下説述しよう。

伊勢物語を業平の物語であるとかないとかいう場合、二様の意味、すなわち実在人物化した業平という区別をたてゝおいた方がわかり易い。他の実在人名によって出される人の場合も同前である。したがって古くはすべてを業平の物語とは見ず、続後撰時代からは昔男をすべて業平と見るといふのは主に前者の意味とすべきであらう。実在人の実作を記名と共にのせる勅撰集が、年月の経ると共に勢語中の昔男の歌を業平、非業平と弁別する力を失い、業平のものとして扱う事は、おそらくその資料にもなったと思われる業平集における増大化の傾向と共に見る事が出来るが、それは実在人物化というものすら伝説化された形でしかとらえられ難くなって来た時代の傾向を

物語る。たゞしこの作者表記に関する問題は單純に数のみで断定できず、同時に又編者の資料に対する態度、撰集の性格にもよると考えなくてはならぬ。三代集時代は勢語の形成と殊に密接な關係があると思われるから一応除外し、以下新古今までは勅撰集に勢語歌は出ぬ故この間は不明、新古今、新勅撰に至っては勢語歌を載せること、統後撰のはゞ倍、以後の勅撰集にして勢語歌をとるものでも一、二首にすぎぬから、必ずしも同等に考えるわけには行かぬ。定家の子為家の撰んだ統後撰は新古今以後約四十年、新勅撰以後十六年で成立しているし、統古今又あいついで成っている。わずかの期間に一般の勢語読解がかなり變つたとは考えにくいが、勅撰編者の裁量で勢語中の古歌が一旦業平のものとなれると、非常な力を持つて後々を支配し易い。勢語の古歌を業平のものと見るのは何も統後撰にはじまる訳でなく新古今、新勅撰にも多く、非業平歌と見る方がわずかである。そして平安時代はいかにも勢語中の業平歌の弁別がはっきりしていた様に解され易いが、そうともいえず。公任が金玉集に古今集古歌である勢語歌を業平作としているのも、業平の歌物語と見た勢語による。<sup>(5)</sup>又源氏物語に「在五が物語」狭衣に「在五中将の日記」と出る書名を見ても、平安時代主流をなしたらしい勢語業平自作説を考えても、平安中期以降一般には勢語は業平が自分の事を又は他者が業平の事をおぼめかして書きなしたものとつけとられていた様である。勿論勢語中の歌には業平ならぬ人の歌や古歌がある事は歌文の知識ある人たちには判っていた筈であり、又特に撰集に業平の歌をえらぶとか、業平の集をあむとか、實在人業平を目した批判的作業や読み方もあったと思う。だから勢語は頭から業平実録ときめ込まれていたとは思えぬが、勢語が読まれた場合、混入する他者の歌古歌の知識によって一々別の架空の男の歌物語と鑑賞されたというのは無理で、読者にとって勢語諸段は、虚構化された業平の歌話として浮び上つて来るのは自然である。何しろ次第に遠のいて行く古人の事である。實在の業平といつても虚構の業平と切りはなす事は出来にくく、勢語自体古典として尊重される深度に応じて勢語中から非業平なる要素をはねのけるには余程の力を必要とせざるをえ



なくなつたと思う。

鎌倉時代中期以降流行したと思われる知頭集は、勢語中の男女を實在の誰彼に当てゝ解釈するのの一つの特色とする。この傾向は知頭集のみならず、やはり鎌倉中期書写と考えられる武者小路本勢語、又は鎌倉末期成立と考えられる毘沙門堂古今集注などにも同様にうかゞえるが、おぼろげな所伝を史實的なものとして行くところに、憧憬する王朝を重々しくかつ自らの身近かなものに置こうとしたあらわれであろう。この解釈法は洵に独断的なもので、人物の当て方たるや、類似物語によつたり、わずかな語句人名にすぎたり、学問的とはいいいがたいが、半面この物語を散漫な歌説話集に放置せず、全体として何がしかの連繫を見出し、業平説話集としてとらえたものとも見る事ができる。おそらく多様の手が入り、諸段階をへて編集追補された漂々たる勢語の章段間のつながりを、實在人に附会する事で解釈し、幼稚ではあるがその底には業平を中心とした平安朝人の生活の復元の志向があるとさえ言え、中世説話集の続出と併せ考えられるものである。尤も新古今にしたところで勢語の説人しらずの歌を業平の歌としているものは、初段とか東下り、二条后段といった、別に何の証明があるとも思われぬが、勢語中比較的連繫をもった業平事実めいた段の歌なのであるし、それはさきに見た平安朝からの読解鑑賞から流れて、知頭あたりでいちゞるしく色濃くなつたものともいえるだらう。

26段の女を知頭集では五条后としているのは秋本氏の言の如くである。しかしこの女を二条后と見る説が見える事が宗祇以後である事は正しくない。又総体として物語中人名を蹟わす説は知頭集で最も甚だしく、知頭の説は愚見抄で否定され、人名を蹟わす説はかなり後退し、整理され、女人としては業平にたしか関りありと古今等で証拠だてられる様な、二条后、有常女等に限定されて来ているのである。そして勢語中の二条后、五条后の混乱は注釈説に見えるばかりではなく、勢語本文にも他段において差異ある個所が見られ、大鏡の業平の記事にもうかゞえるところであ

るから、少くとも平安末より、本文と注釈とに二条后関係段の一部には、両立したものがあつたのである。したがって26段の女が宗祇以前には誰とも定まっていけないのではない。くり返して言えば宗祇以後26段の女を二条后と見る事が固、定、し、た、という秋本氏説は、注釈学説として示されたものに限り正にその通りである。しかし平安鎌倉時代には誰とも特定人に当てずに読解されていたという証もないのである。秋本氏は「廿六段は業平の失恋事件であり、業平の歌である」とすると、文章上不都合が生じる」とし、「またさういふ解釈が旧注も肖聞以前には成立していなかったことが証明できる」と言うが、「旧注も肖聞以前には」とは所謂旧注時代に限定した見方ととれるが、必ずしもそうでもないらしく、もっと古くにさかのぼる様で、氏は「廿六段に即していへば、偏向した態度による解釈の発生成立以前に立ち帰らねば伊勢物語本来の妥当な解は得られないのであつて、偏向解釈の発生順序を逆にしていへば、まづ五条辺の女を二条后に当てることを廃し、失恋当事者を業平に当てることをやめ、更に歌の作者を業平とすることもやめて、ただ読人不知の昔男の歌の作歌事情が語られてゐるものとして、前提なしに詞書の物語文章に対処しなければならぬ」と言う。従来の偏見に拘泥せず、本文を直視する、といへば正に正統的方法ではあるが、勢語に則した場合氏の結論に対しては更にいさゝかの深化を試みざるをえない。

まず第一に氏の言うところは、要するにこの段を業平の物語と見るのは偏向であつて、それを止めるという。ところが勢語は各段とも「昔男ありけり」ではじまり、その筆作態度は中心的に業平の歌及び事蹟を伝えんとしていると見られる以上、「昔ありける男」を業平―勿論實在人としてではない―と見るなという事は妥当ではあるまい。しいて業平をしりぞけ誰しれぬ男と化して読む事は又一つの偏向であらう。氏は歌の本来の意味とそれが勢語の歌となつた場合の意味の異なる事はよく認めて居られる。では一章段が孤立した説話としてある場合と勢語中の一段としてある場合とは、やはり意味の差異がありうる事を認めなくてはなるまい。26段の女についても男と同様である。この女は

「五条わたりなりける女」とある。勢語の女は何処の人ともわからぬ、ある女というのが多く、春日の里にすむ女とか東国の女とか、更に西の京の女とかいう指示を加えているものもあり、「五条わたりなりける女」の様に京中の所在を明示したものは、4段「東の五条に大后宮おはしける西の対にすむ人」5段「東の五条わたりにいと忍びて」行った女、等で、これらはいずれも二条后なる事が暗示され、又は末文等に明示されている。この章段の作者が「昔ありける男」を示し「五条わたりなる女」を出している事により、何を語ろうとしたか、又それがどう受けとられる性質のものか、という事についての思考を全然加えない事も正しい解釈とはいえぬと思う。こういう詞をもった章段が入って来る事自体、既に二条后物語につながるものとしての何がしかの構成がある、つまり読解の偏向というが、それは早くよりある程度勢語の生成にからまっているものではなからうか。26段は前節にも言及した、後よりの挿入と疑わしい一群中にあり、後に加えられた疑が濃い。現にこの段を欠く本もあり、短章段で本文の相異も甚だしい。もともと歌が書き込まれ詞が附加され、一章段としての位置を獲得したものではないか、という想定ができそうな一段である。こういう風に考えると、勢語の成立過程や本文の問題をぬきにしては、この段の正しい解釈は得えられない様になる。

第二に氏はこの段を業平の事とすると文章上不都合が生じる、という。氏はこの段については定家本を絶対視して居り、大島氏本は改竄といつて却けられる。何故であるかの説明はないが、恐らく氏の偏向理論からであらう。勢語本文はどういうものが正しくかつ純粹であるかは未だ明かにされていない。定家本はたゞ定家書写原本にほど近いところまで復元できるという事と、この定家本の流布及び常識的信用によってよく用いられるにすぎない。もし定家本を文章上不都合なく解釈して置ちつけようというのであれば秋本氏の訳文はすぐれている。しかし勢語26段の解釈とはそれに止るものではない。本文の相異、成立上の疑問、文章上の不都合、読解における偏向と言われた要素等々、

これらの中の具合の悪いものは捨てざるのではなく、そのまま直視しなくてはなるまい。

今勢語伝本を大別して、(一)定家本をふくめた百二十五段の本、(二)広本、(三)その他の別本とした場、26段本文はほぼ三様となる。つまり1)前に示した定家本式の形、2)前に示した大島氏為氏本式の形、3)全く欠くものに分けられ、右諸本三系分類にほゞ応ずる。たゞし広本系ではやゝ複雑で、定家本に対して失恋者が詠作者である事がきわめて明らかな「昔五条わたりなりける女をええずなりにけることゝわらひける人の返事に」という本文をもっているのは、大島氏旧藏為氏本、阿波文庫旧藏本、谷森本、神宮文庫本、それに現存せずして参考伊勢物語に引かれている、別本の一とも見るべき為家本である。広本系中詞章が定家本にほゞ同じものは一誠堂本、泉州本であるが、前者は「ええずなりにけることを」と異り、又歌についてはいづれとも異り「思へえずそてになみたささくらしもろこし舟もよせつばかりに」という風に通説に適する本文をもつ。更に広本系の大島氏本、阿波文庫本等、参考本為家本は、「昔五条わたり……」とあって「男」の語を欠くのを特徴とする。定家本でも山田清市氏によって根源本第一種とされた為氏本ではこの語が補入になっているのは單なる誤脱かもしれないが、この男の語は書写上脱しやすい語でもなく、又改竄によって除去されるものでもなく、こういう形の一系列の存した事はたしかで、その中にいかにも詞書的な、勢語章段として熟さない形をうかゞう事も出来る。このような本文の詞書では勿論詠作者は昔ありける男である。その点定家本式本文でも、文章を素直に解すれば詠作者は昔ありける男である。異なる点は失恋の当事者が昔ありける男であるか否かである。大島氏本式の詞書では前者であり、失恋を笑われるという事と相まって、自ら大げさなおかしみをさそう表現で失恋の内容を説明したものであり、6段芥川鬼一口譚にあるような、非力な男の失敗をくり返して伝える物語であろう。歌を秋本氏説の如く、もろこし舟とは恋の強敵と解してこそ、五条わたりなる女は暗に一まわりふくれ上った二条后と重り合わざるをえない様な構造をもつのがこの段の特色である、という事になる。定家本式の本

文では男はたゞ巧妙な歌を贈ってやっただけである。そして歌を右と同じく見れば、人の失恋事情を説明しつゝ、単なるしみじみとした同情というより勿論ユーモアたっぷりのものと見なくてはならず、同情の歌の段と考えたところどうも落ちつかぬものがのこる。だからこの場合歌の解釈はむしろ通説の方が合致するように思われる。なお一誠堂本では詞章は定家本式の本文で、歌は通説に適する本文であるのは意味ありげでもある。定家本式本文では五条わたりの女とは誰しれぬ女といわざるをえない。そう見るのは源氏夕顔巻などにある、五条わたりの誰しれぬ女などの理解がからみ合つて支えられたのかもしれない。ともかく大島氏本型の本文では詞章において男なる語を出さず、又失恋を笑うなどという表現にやゝ不審を起さしめるものであるが、定家本氏の本文では逆にそういう点は整理されているけれども、昔ありける男の影はうすく、勢語中の一段としての意味や当の女についてはぼやけたものになっている、という差異がある。そして今のところ本文上どちらが本来の、又は古いものに近いか断定し難いのであり、定家本型本文にしたところで、秋本氏の解は成程文章上難がないといつても、「わびたりける」を男に同情して共に悲しんだ、とか、こゝで切つて読むとかいう解釈を真向から切り捨てゝる強さもないように思う。

26段の問題についていさゝか言を費し過したが、私は秋本氏の着眼や方法に敬意を表しつゝも、本段の問題は簡単に裁断し切れないところに蕩揺する勢語形成の相をとらえたいのである。この段の原初の成立事情は右に臆測した程度以外にはわからないが、平安期の勢語の一段としての位置を確立し、読まれ支持され形づくられてくる過程に、昔男なる業平物語としての指向や、二条后物語から導き出された要素は介在していると思う。しかしその場合といえども、本来明瞭に二条后物語を語るというのではなく、既存の諸話にかすかな糸で結びついている様な類同化や作為によつてゐるため、解釈伝流の諸作業が、一方には二条后や五条后にはつきり結合させ、他方それを表面に出してうけとる事をせず、そして同時に本文の整正や流動相異を生じたものと思う。

26段にしる29段にしる、それぞれ二条后物語である45段又は6段の一群、及び76段という、一は若き日の情熱と失恋、一は晩年及ばぬ地位にある后への回想的歎息の物語から、さりげなく短章の歌物語として生れ出で、或いは形成されている。「五条わたりなりける女」や「春宮女御」は二条后でないといえばそうもいえる。もとより史実とは無関係であるが、虚構の二条后だと見きわめようとする、そこはかたなくそらしてしまふ底の書きぶりである。そのくせ執拗に二条后の物語から全く外れて受けとられる事を許さない。こういう性質は当の345676段にもあるものだし、次第次第に一般的な男女物語の中に溶融して行く業平物語が逆に鮮かな姿態をもって浮び上るのがこの物語の特性である。だから二条后の糸を強引に張って理解しようとする事も、又逆にその糸をずたずたに断ち切って解釈しようとする事も、共にこの物語をおしゆがめて見る事に他ならない。

### (五)

二条后と業平の恋物語が最も長大かつ好篇をなしているのは65段である。これが二条后物語であるというのは最初から明示はないが、それとなく知れる。まず男は「在原なりける男」であり、女は「おほやけおぼしてつかうたまふ女の色ゆるされたるありけり。大御息所とていますがりけるいとこなりけり」とある。この帝は、「顔かたちよくおはしまして仏の御名を御心にいれて、御声はいと尊くて申し給ふ」とあるのは清和帝について三代実録に「風姿甚端巖如神性」と記されてあるのに合致する。又段末に「水の尾の御時なるべし」とあるのは、大御息所の説明として「大御息所も染殿后也五条后とも」とつゞく部分と共に所謂後人の注らしくもあり、456段等と同じく人物を顕わしているが、本当に後代の注記的なものが混入した部分もあるようである。というのは、塗籠本及び広本系の谷森本阿波文庫本では「五条后」以下がなく、一誠堂本、泉州本、大島氏為氏本等では、この部分が、「二条后とも或五条后

とも」(誠)「五条后とも二条后とも」(泉)「二条后とも」(大)となっている。(泉、大本、大御息所はトアリ)つまりこの末文の末尾がかなりゆれうごいているが、これらは明らかに注釈的な手が入った結果である。356段の末文を見ると、

3段、五条后……塗 二条后……その他の本

5段、五条后……阿・谷・神・大 二条后……その他の本 コノ部分ナシ……塗

6段、二条后……諸本

という様に相異がある。これは二と五がきわめて誤写され易いという理由に加えて、一連中の45段が「東の五条に」忍びて行くとか「東の五条に太后宮おはしましける西対に住む人」とかあるため、誤写又は改訂が比較的容易であったらしく、これらが原因して65段末尾の混乱となったと思われる。そして業平物語は二条后、五条后、それに染殿后を加えて、物語中の女を定める説が鎌倉時代盛行したのである。ともあれ65段は、人物的に業平二条后を目した物語と解せられるが、更に内容的にも356段又は東下り諸段の一連や後日譚という二条后物語と同じ筋書の下に構成されている。

女は帝の寵愛をうけていた身分ある人である。男は若かった。そして女と関係を結んでいた。愛情はつのるばかりであるが、こういう状態では身の破滅をまづばかりである。ところがこの事が帝の耳に入り二人の間は引きさかれる事になる。こういう敷置は3456段でくり返されたものに通ずるが、それらの章段では女を失った折の男の悲歌が中心となっているのに対し、この段ではそれがなく、つのる思いをふり払おうとして出来ない男の恋情が歌い出されている。又当の女は、356段では一体どう思っているのかほとんど示されていないが、この段ではやゝ説明が加えられる。男が「思ふには忍ぶることぞまけにけるあふにしかへばさもあらばあれ」と、一途なのに対し、男にひかれ

つゝもやゝ後悔の色あり、破滅を怖れ、又帝のすぐれた風姿を思うて悲悔を感じる。これは3ゝ6段で隠されている女の心中を少々露わに説明したものであるとされる。3ゝ6段では中でも5段など「あるじゆるしてけり」という風に男が女に逢うた如く示されているが、女も又同じ思いにといった恋物語にはなっていない。そして又6段では男が女を盗み出す条、広本系諸本（泉本を除く）塗籠本は「からうじて女の心あはせて」と説明があるが、「えうまじかりける女を年をへてよばひわた」った男の行動に対する女の応じ方を少し見せているし、諸本とも途中草の上の露を「かれは何ぞ」とたずねるあたり、全く男の一方的な恋慕というわけでもない。これら男女の仲の次第は65段で詳細に語られている形になっている。さて65段では、引きさかれた男女は、男の方は流罪、女の方はいとこの御息所が引きとり、蔵に入れて折監となる。7段以下の一連の東下り段は二条后段に連続しているので、女は取りもどされ男は「身をえうなきものに思ひなして」放浪の旅に出るという風に、漂々と語りすゝめられる様だが、途次たえず京の女を思つて詠作がある。65段では、流された男は夜毎に京に通いつゝけて笛ふき歌をうたい、蔵にこめられた女は「あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめよをばうらみじ」と泣いていたが、男が近くに來る事をしりつゝも逢いえず「さりともと思ふらんこそかなしけれあるにもあらぬ身をしらずして」と思っている。こういう風にむしろ女の側の心中が歌によって示されている。そして男も放浪しつゝ、「いたづらに行きては來ぬるものゆゑに見まくほしさにいざなはれつつ」と歌つて断ちがたい思いをのべる、というのである。女は離れた男のうたをききつゝ返答もできず、男は猶も恋しいたう心を歌に託すのは、76段、男と二条后の後日物語で男が往事をほめかす回想の歌を贈る条にさも似た風情をすらおびているといえよう。

この様に65段は、3ゝ6段、東下り、76段などから汲み取れる二条后物語に照應する、暗に二条后業平と目される男女の物語を形成している。65段は古今読人不知歌、古今典侍直子の歌などが、男や女の歌として用いられている点



などから明らかにこれらを巧に用いて作り上げられたもので、恐らく既にあった二条后物語の上にくみ立てられたものと推される。そして既存のものとは異り、女の側の心事を歌を用いて表出しているのであり、男の方も、その絶唱佳調によって一段を掩うという底のものは少く、むしろ男女唱和並置の形で両者をえがき出し、女の悲しい境遇や苦悩に対して男の方はやゝ戯画化されており、459段や76段など、業平の歌によって恋する男の姿が生動したり、深い哀愁にとざされたりする見事さをもつものとは異つたものとなっている。しかし、諸歌を活用しつゝ詞章を簡潔かつ十分につゞけつゝ散文化を試み、悲恋をえがき出し、この段に先行すると見た二条后の諸物語のそこはかとなない連がり方に対して、まとまつた一篇となり、勢語中最もすぐれたものゝ一つといえる章段を形成しているのである。

暗にそれと示される二条后と業平の物語は、こういう様に業平のわずかな歌と実在人からの所伝がまつわりついて波及していった伝え事の波にのつて生じ、物語中では実在人への興味から離れた歌話として、男女悲恋の物語へとつくり上げられつゝも、話の源泉は依然として二条后につながっている跡を示している、といったものである。これは直ちに史実と解するとか、或いは虚構の人物としての業平二条后譚の統一連関を勢語中に求めるとかいう解釈を拒否するものである。しかしその幾層にも織りなされた中に、業平二条后の男女の物語は息づいているのであり、さまざまに彫りこまれようとしているといえるだろう。95段を見るとこんな形で出て来る。

むかし二条の后につかうまつる男ありけり。女の仕うまつるを常にみかはしてよばひわたりけり。いかでものごしに對面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむと言ひければ、女いと忍びて、ものごしにあひにけり。物語などして、男、

ひこぼしに恋はまさりぬ天の河へだつる関を今はやめてよ  
この歌にめでてあひにけり。

二条后という名はこの段でははっきりと示される。しかしそれは男の恋の相手としてではなく主人として出て来るのである。95段という恋物語は、この二条后に仕える男女の恋の物語である。しかしこの物語の人物関係は直に今見て来た65段の冒頭を想起させる。

昔おほやけ思して使う給ふ女の色許されたるありけり。大御息所とていますがりけるいところなりけり。殿上にさぶらひける在原なりける男の、まだいと若かりけるを、この女あひしりたりけり。男、女がた許されたりければ、女のある所に来て向ひをり……

95段の宮仕えの男女の恋とは、既にこの二条后物語である65段に見えている。そして又、二条后段である76段では、昔、二条の後の、まだ春宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛府にさぶらひける翁、人々の禄賜はるついでに、御車より賜はりて、詠みて奉りける……

とあって、物語の男が、二条后と明示された人の從者的地位にある姿があり、これらを見くらべると、95段の様な形の章段が生じて来る由來もわかるのである。すなわち二条后物語に発し又は関係つけた形骸を露わに止めつゝも、人物関係や筋立が次第に移行し、一般的な男女物語に溶け込むが如き有様を示している。そうした男女物語とは、古歌などによって、男女の心情の諸断面をきり出して見せる、透明凝結した小篇というべき形によって勢語の各所にちりばめられるものではあるが、それらは次第に多くの類似の附加が可能な割に生氣を失った歌話に墮しやすしいものでもあった。

二条後の物語、すなわち二条后を出したり、二条后にまつわる事であるのを暗に示したりした章段は、この様にほぼ一定の中心から波紋をえがく如く、相似た主題がくり返され、もしくはそれを中にひそめている。歌中心の伊勢物

語には同じ様な筋立のくりかえしの章段が比較的目につくが、二条后物語群はその中きわめて大きなもので、かつ勢語中の重要な柱となる一群といえる。勢語の業平の恋は散発的な、誰彼に対する懸想応酬によって占られる如く思うというのは、勢語全段を、独立した多彩な情話の小篇の雜然たる集成と理解する結果である。二条后物語諸章段は必ずしも相互に密接な連関をもって語りすゝめられている訳ではないが、既述のような、隠微な連りの糸で結びつけられている。そしてこういう一群が勢語中掌を開くが如くにひろがってくり返されているところに、これらを支えて来た作者達の背後にある、業平二条后の恋の伝承と、作者たちをゆりうごかして行つた虚構への志向と勢語の限界をあらためて見直す事が出来、そこに歌物語勢語の一方法をさぐる事が出来る。

二条后段として以上の如き章段を中心に考察をすゝめて来たのであるが、はじめに提示したものの中100段だけを残した。これは二条后段であるという事が広本系にだけ示されているものである。本段を取扱う場合、当然大和物語在中将段に問題が波及する。そしてそこに語られる二条后物語を取り上げる事は、勢語二条后物語の性格をより明確にすると思うが、紙数の関係上、他日を期して論述したい。

(注)

(1) 宇多天皇御記寛平元年

「去月陽成君母后不豫。而今或藏人等言曰。娠善祐之兒臨其期。雖非有他事。每聞此事悶慟無限。」

(2) 善家秘記や陽成天皇に関する説話等についての考察は益田勝実氏「説話文学と絵巻」に詳しい。

(3) 国語国文研究第十八九号「鶯のこほれる涙——二条后の一首をめぐって——」なおこの記名については契沖貞淵等の説あり。

(4) 大阪経大論叢第十三号「伊勢物語読解の偏向」

(5) こひせじとみたらし河にせし御祓神はうけずも成りにける哉 業平

…勢語章段番号は「伊勢物語に就きての研究 補遺篇」に示したものである。